



公案と見性

柳 幹 康

白隠によれば我々はみな、仏心ぶつしんという本性ほんじょう（仏性）を例外なく具そなえていますが、残念ながらそれを見失い、迷いの世界に転落けんらくしています。その本性をしかと見てとるのが見性けんじょう（開悟）であり、白隠は「無字」の公案（禪の課題）に参究することで見性したのです。「無字」の公案とは以下のものです。

ある僧が趙州じょうしゅうに尋ねた、「狗子いぬこに仏性ぶつじょう有りや否いなや」。趙州曰いわく、「無」。

（『遠羅天釜 続集』）

前回申しました通り禅門では、これを絶対の「無」——「有無」や「虚無」など一切の分別を寄せ付けぬもの——として参究します。その参究の具体的な仕方について白隠は、次のように述べています。

動静どうじょう分け隔へてなく常に念おもいを凝こらせ、「我がこの臍輪さいりん氣海きかい（下腹部）はまるこ

と趙州の「無」である」「この「無」の一字に一体どんな道理があるのか」と。そうして一切の妄想分別を打ち捨て、ただただ参究していくのであれば、必ずや大疑団（極めて深い疑い）が現前する。

もし大疑団が現前したなら、あたりはみなガラリとして何もなく、生でもなければ死でもなく、万里にも及ぶ厚い氷の層の中にいるような、あるいはガラスの瓶の中に坐っているような感じがし、ことのほか爽やかで、実にハッキリとした心持ちになる。そうでありながら心には何一つ思いはなく、坐っては立つことを忘れ、立っては坐ることを忘れる。胸のなかはただ一つの「無」の字があるのみ、それ以外に何もない。あたかも広々とした大空に立っているかのようだ。この時、恐れることなく、また知的理解を差し挟むこともなく、一氣に進んで退かな

ければ、忽然と氷の層が砕け散り、透明な玉でできた楼閣が瓦解するように感じ、生まれてこのかた見たことも聞いたこともないような大きな喜びを得るであろう。この時、生死（迷い）や涅槃（悟り）は昨夜見た夢のように、全宇宙は海中の泡のよう、一切の仏はみな虚空に閃く稲妻のようだ。これこそ正に大悟徹底、大事了畢である。（この体験は人に）伝えることもできなければ、教えることもできぬ。自分で水を飲んで始めて、その冷たさ暖かさが体感できるようなものだ。

（『遠羅天釜 続集』）

白隠は「無」を用いてこのように指導し、数多くの人々を開悟に導きましたが、やがてその限界を感じるようになります（『宝鑑貽照』）。そこで六十代の時に新たな公案「隻手音声」を作り出しました。これは以下の二重の問いからなります（『白隠禅画墨蹟』二玄社、二

〇〇九年、解説(二二頁)。

第一の問いは次の通りです。

「まずは隻手(片手)の音を聞け。両手を打てばパンと音になるが、片手を挙げるだけなら音もなければ匂いもない。」

さあ、どう聞くか(『於仁安佐美』卷下)。

この課題に参究し、実際にその音を聞いた者は、次の第二の問いに進みます。「すべての音を止めてみよ」(『八重葎』卷三、『壁生草』卷上)。

このように参究させたところ、従来の指南とは抜群の相違があったため、以降白隱は専らこの「隻手音声」を用いるようになります(『隻手音声(薺柑子)』)。これを「初関」(最初の関門)、あるいは「両重の関」(二重の関門)と称します。

さて白隱はこの関門を突破した者に対し、その「見性」(開悟)を証明する「龍杖拈子図」を与えるようになりました。それには



龍杖拈子圖
(龍翔寺藏)

「龍杖」(龍の形をした行脚用の杖)と「拈子」(説法に用いる法具)が描かれており、それぞれ「上求菩提」と「下化衆生」を象徴しています。つまり白隱は「龍杖拈子図」を与えることで「見性」を認めると同時に、次の「悟後の修行」——上求菩提と下化衆生の実践——へと人々を向かわせるのです(芳澤勝弘「菩提心なければ魔道に落つ」『白隠禪師自筆刻本集成 月報』四、一九九九年)。

柳幹康(やなぎ みきやす)

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士(文学)。現在花園大学国際禅学研究所副所長・准教授。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』(法藏館)。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*ㄨ切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・感想など

本誌へのご意見・感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

- 【花園】第69巻 第12号(通巻第820号)
令和元年12月1日発行(毎月1日発行)
定価55円
- 【発行人】栗原正雄
【編集人】畠中寿浩
【印刷人】喜田眞司
【発行所】〒616-8035 京都市右京区花園
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400番
電話／075-463-3121番

表紙の絵 「合わず手が
幸せつくり人つくる」



「しあわせとは手と手を合わせた状態の事」手と手をおわせると怒りや欲などがおさまり、心が静かになるから不思議です。 絵・花咲幸絵

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。